様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：７４３０６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８４１５９

研究課題名（和文）近畿地方における初期農耕集落形成をめぐる考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological study on the formation of early agricultural settlements in the Kinki district

研究代表者
森岡　秀人（MORIOKA, Hideto）

公益財団法人古代学協会・その他部局等・客員研究員

研究者番号：２０６４６４００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,000,000円

研究成果の概要（和文）：科学的年代測定の発達と適用により、長期的年代が与えられるようになった弥生時代の農耕化問題について検討を加えた。日本列島中央部に位置する近畿地方の研究が鍵を握ると考えた。とくに早期や前期の時期は、農耕文化の伝播には時間的な階段がみられ、その格差も顕著である。本研究では実年代論もからむ弥生時代の始まりと農耕社会の定着のようすを明らかにすることを目指した。遠賀川式土器編年の再構築を基本として、石器・木器・青銅器・鉄器などの生産・普及の研究を進め、住居論や墓制論、さらに環濠集落の地域相を調べ、社会画期の差を分析した。

研究成果の概要（英文）：We have studied about the beginning process of agricultural society in Yayoi period, which has given long period through the development and application of scientific dating technology. Especially in the earliest and early Yayoi period, there are time lags of transition to agricultural culture among some areas, and there are marked differences. Our study has aimed to explain the dawn of Yayoi period taking account of absolute dates, and phases of established agricultural societies. We have studied production and distribution of stone tools, wooden ones, bronze implements, and iron ones, based reconstructed chronology of the Ongagawa style potteries. In addition, we analyzed differences of transforming times in local societies through studies about settlements and tombs, and how moated circular settlements were in every areas.

研究分野：弥生時代

キーワード：近畿地方　自然科学的年代　初期農耕　伝播　遠賀川式土器　大陸系磨製石器　環濠集落　生産活動

１．研究開始当初の背景

（1）日本列島に展開した初期農耕集落の考古学的研究は、弥生時代の年代問題が浮上して以降、より一層重要性が高まっている。21 世紀に入って以降の研究状況は、歴博グループ研究の進捗による弥生時代の新年代観提示の激変を受け、その土台からの再構築が要請されている。具体的には、2003 年、本格的な水田稲作は北部九州で紀元前 10 世紀後半から始まったとする通称「歴博年代」が台頭し、従来 500～600 年程度と理解されてきた弥生時代が 1200 年間もの長さがあることへの実年代観のシフト換えがもたらされ、従来編年による研究は根本からの再検討を余儀なくされた状況にある。調理具である土器器面の微量付着炭化物のAMS法炭素14年代測定がもたらした常識を覆す年代値（弥生時代の始まりが中国西周期併行）が招いたものであり、公表の当初から考古学界の反応は賛否両論の姿勢がさまざまな形で示されて、議論の方向性はその後、予想以上に多様化していった。

弥生の始まり紀元前 10 世紀説に対する直接間接の疑義が、既往の年代研究や多くの器物の型式編年論、実年代論、伝播論に再検討を促し、全く新たな研究情勢を生み出したことは周知のとおりである。とくにこの 10 数年、弥生時代の研究自体が予期せぬほど活性化したのは確かなことである。一定の距離を置いてきた実年代論に再び直面し、基盤となる多くの考古学資料の互いの整合性が相対的な議論の範囲を超えて年代的枠組みを前提に進められる傾向が勢い強まっていった。近畿地方の弥生時代後半期の年代軸は既に大幅に動いていたが（後期の始まりが紀元 1 世紀初頭～前半）、科学年代がその前半期の年代を長期編年型に刷新していった方向性はこの動きと連動したものではない。したがって、伝来系交差年代資料を基軸に「考古年代」を重視した弥生時代中期後半以降の実年代変更とはまた異なった批判的姿勢も必要となる背景が存在した。

（2）中国や朝鮮半島に近い北部九州の在来の大陸志向型年代観と東日本に施設を置く国の大型プロジェクト研究における新年代観の発信は、当座、方法論や研究体質の根底からの違いも手伝って対立するような側面も生じていた。その一方、初期農耕の発現、伝播問題では欠かせない近畿地方の研究者の多くは、東西両地域の動きを見据えつつ全体として目立った主張もなく、静観の構えを採ってきたように思われる。日本列島中央部に位置する近畿という地域は、複雑な列島事情を捨象して「弥生文化」の総称が与えられる中にあって、その構成要素を最も平均的に保有する地域条件があるとみており、この地域の特性を再評価しておく必要がある。このように、この時点で総合的な研究地平を押し拡げて、本格的な農耕化の足取りを検証する機が熟してきたと判断される背景があつた。

（3）また、本研究の母体機関である（公財）古代学協会では、京都府長岡京市雲宮遺跡（1997 年発掘調査）の報告書作成と再評価を企図した内部特設研究会を発足させて、弥生時代開始期の研究体制を築きつつあった。そして、年代論を含めた初期農耕の乙訓地域における検討や山城地域、広く近畿全域を対象とした比較研究をスタートさせようとしていた。既に各地で弥生時代遺跡の任意な地域研究会がいくつも誕生し、活発に研究活動を始動していた長い蓄積の土壌を持つ近畿ならではの有力な基盤、環境に研究の現状を打開する動きが備わってきたと言える。

２．研究の目的

（1）初期農耕過程の具体像を解明するに際して、流動的となった実年代論に対してどのような姿勢で臨むのかといった課題があるが、近畿地方では統合的な考古学的研究は意識しては進められていない。この問題がいったん沈静化した時点での近畿地方からの再検証の作業と発信が不可欠と考えられたため、遠賀川式土器の広域編年研究をあらためて押し進め、その細分化と併行関係からアプローチすることをまずねらいとした。弥生時代前半期の保有時間が歴博年代のように極端に間延びするかどうかは、長い研究史を有する弥生土器の編年再構築から検討できるとみて、あらたな枠組みとして提示された「科学年代」との対照を試みる作業を土台とした。土器型式単位の較正年代に示準を採れば、各地の個別編年の横並び、併行関係は着実にたどれるものの、その変化が急激なものなのか、緩慢とみるのが真相なのかは年代値を雄弁なものとする上にも必要な基礎的研究である。かつては一、二世代、30 年前後とも言われた北部九州から近畿大阪湾沿岸への水田稲作の急速な伝播論、速いテンポによる西日本拡散過程もこうした科学年代の示唆するところは、瀬戸内ルートでさえ 300 年近くもかかる緩やかな広まりと表現される。提示されている実際の年代データは、大阪湾北岸で紀元前７世紀、奈良盆地で紀元前６世紀に伝わり、伊勢湾沿岸地域にも紀元前６世紀中頃に到達する数値を示すし、その実年代観は今や普及書のレベルでも巷で市民が触れ合える存在となっている。東日本の中部高地や南関東では紀元前 3 世紀とさらに遅れる。

西日本の水田稲作の基幹農法が遠賀川式土器の段階的波及に伴うものとするなら、時間的に緩慢なこの間の土器の変化は東方波及にかなりの階段の形成をみることも予測され、併行関係など編年自体の見直し、細分作業を包括しての再構築が不可欠な課題となる。その結果がＡＭＳ法炭素年代の枠組みと同調し得るのか、編年段を低いものへと導き、実年代の格差や長期編年自体に抵触をきたすのか、揺籃期の弥生文化の浸透に対する印象や評価は大きく異なってくるので、本科研でも各地要所の基本資料多数をきわめて

短期間に一気に俯瞰した速射的比較・観察を行い、遺跡の実態とともに各地で相互的に検討することを目的とした。
（2）また、本科研では向かう先がかなり総花化するおそれがあるものの、専門分野別に緻密な個別研究を加え、縄文文化から弥生文化への移行、さらに農耕化の進み方の変化がどのような内実を踏まえて議論できるのかといった問題にもメスを入れ、研究討議の機会を何回も持って反復的に相互批判しつつ、その総合化、統合化と考古学サイドからの新たな発信姿勢を求めていくことを目的とした。近年の研究は、土器研究、石器研究、木器研究、金属器研究や集落研究、墓制研究などがややもすれば蛸壺化の状況に陥り、木と森との関係が必ずしも社会復元の両輪とはなっていない。この科研では考古学研究の意図や方法論、学問研究の現状を踏まえ、共同研究や学際的な融合・横断的研究も重視し、初期農耕社会の段階的発達の検討や画期の把握、とくにそのずれが各分野の研究からどのように掌握可能なのか、なぜそのような現象が起こるのかの解明を目指した。

３．研究の方法
（1）研究に際しての第一の指針として、自然科学的な方法による年代測定や気候変動など自然現象で考究されてきた昨今の研究蓄積をいったん横に置き、あくまで考古学上の遺跡、考古学的な遺物を基礎資料として、その観察と同定、段階的組成変化から、台頭してきた「科学年代」を検証することに基軸を置いた。そのためには、既に各地で遺跡・遺物のまとまった出土資料、層位的方法などで時期限定が加えやすい一括性の高いものを対象として選りすぐり、丹念な観察と各地域との比較検証を行うことが基本となるため、各分野の研究者が所属時期を相互確認しつつ、全体分野での調査を遂行し、現地討議を地元研究者も交え、行うこととした。
（2）調査項目は、土器様相・石器様相・木器様相の生産・消費の証左確認に加え、鉄器・青銅器の存否とその生産状況を踏まえ、集落の立地や近隣遺跡、近隣地域との関係を追求し、初期農耕社会の成立過程や生産体系、技術の変化、画期を解明するための観察や量比を比較した。具体的には、主要遺跡の基準資料について、網羅的に現地熟覧観察を繰り返し、遠賀川式土器を中心に弥生時代前半期の土器の位置付けに関し再検討を進め、調査地各地の一括資料の相対的位置づけを丁寧に行い、併行編年表の新基準を設定、作成する。その変化と不可分な石器・木器・金属器の実態を同時に照合観察し、大枠での対応関係の把握と大地域間、隣接地域間の様相差や類似性などを調べていった。それらの作業は専門分野が異なっても常々相互確認に努め、画期の想定の違いなどの討議を同時に進め、初期農耕活動の画期の押さえ方の違い、本末影響関係などの議論すべき主要課題を常々共有するようにした。
　既に調査報告書や関連論文などで性格や編年的位置づけが場所を得ている資料についても、現段階の最新の観察でそれぞれが検討し合い、とくに時間的な緩急の問題を視点として潜在させつつ、議論を深化させていく。
　また、気候変動、水田立地、土壌、動物利用、農耕社会における人的抗争などの比較考古学的研究も併せ参照しつつ、本研究題目に迫れるよう、支援情報の探索と接点を積極的にとらまえ、総合研究の基盤を築いていく。

４．研究成果
（1）文化段階が多様な弥生時代を容認する年代軸の下、縄文人・弥生人以外に縄文系弥生人や渡来系弥生人も日本列島に同居している。本研究では、そうした文化加担者の人類学的解剖学的位置付けや系譜論に依存しやすい文化的、種族的理念の域を脱し、灌漑水田稲作への傾斜を本格的農耕度として再吟味を企てることにより、その段階や画期を総合的に再検討した。もとより近畿と北部九州を比較しただけでも、農耕社会の発達過程はさまざまな局面で異なっている。土器形質の認知差、石器生産の分業度や体制の違い、器種や製作技術の偏差、超厚葬墓の存否や社会集団内部の成層化現象の駆動にみえる強弱、高地性集落の林立性や群棲度をはじめ、多くの社会変化要素でそのプロセスは顕在化している。とくに近畿の弥生社会の広域にわたる互恵性的体質は、これまで政治的な先鋭度がいかにも低い印象を与えてきたものの、多くの物品消費レベルや物流の促進に着目すれば、きわめて均質性、等質性と安定性に富んだものと言える。その構造を維持してきた紀元前の大形農耕母集落は全般的に肥大化し、弥生中期の中で確立していくが、その前段となる前期後半段階からの変化、移行の具体像は掌握しきれていない。いかなる推移を示すのか。現象的連続性や本質的な持続を容認してもよいのかなどの問題点について、小環濠分散期と肥大環濠期の接続部分での仔細な動きに関し、地域ごとの違いと共通点を見い出すことができた。
（2）また、灌漑水田に振り向けられた開墾・土木作業や耕起農具類の安定した数とシステム化していく農法の普及を支える必須条件の一つとして石製工具製作と木工技術の格段の向上が考えられ、その整備・供給力に伴う技術の本源がどのような方法で近畿に導入され、生産体制を築いていったのか。また、技術の変容がどの地域でいかに起こったのか。大陸系磨製石器の器種ごとの量比関係や形態的違いも地道な観察を行って分布の特性なども掌握した。石包丁一つ取り上げても、その製作技術、例えば穿孔法などに大きな地域差が認められ、それが関門海峡を境として分離できることなどが解明できた。資料が一躍増大してきた木製品研究では、縄文時代との違いは重要なテーマであるが、研究法

の高まりとデータの蓄積からは、初期農耕段階に入ってからの植生利用、森林資源開発の方向転換など、製作技術の飛躍と相俟っての木工社会としての発達状況、画期の掌握についても見通しが得られた。生産と消費の両面での農耕化現象を木材利用の面から考証する研究も一定の成果があがった。具体的には弥生時代前期の末に直径 60㎝ を超えるアカガシ亜属大径木の製材技術の獲得が進み、とくに長さ 1m 以上の長大なみかん割材を原材とする未成品連結技法などの伝播や柾目材利用の進行に関しても、この画期が重要な位置を占めることが確認できた。弥生化の段階的展開を考える諸現象の把握は、農耕集落の推移と並んで重要な成果である。さらに、農業生産力と関わる木製品の製作工程に導入される鉄製利器類の普及や浸透力の実相がいかなるレベルであったかは、遠賀川式段階では顕著な導入・普及に至らないことが明瞭となった。鉄器と青銅器は生産遺構の発現時期・立地要件・炉構造・生産体制、集落の性格などほぼすべてが異なっており、金属器生産としての初期農耕との関わりも大きな違いをみせることが判明した。

（3）集落形態については、構造上の問題もかなり解明され、生産・消費関係や物資流通論に基づく集落モデルや社会モデルも数多く提起され、この 50 年間の調査・研究の蓄積には目を見張るものがある。ランクサイズに基礎を置いた集落の比較研究も資料母数の増加があって、判読しやすい成果があがっている。また、近畿では環濠集落の一定の発達がみられるため、その構造変化に基づく大形農耕集落の段階へと向かう状況も小地域単位に確認した。各地域には定着的な農耕集落が早い段階から現れるが、縄文時代晩期からの突帯文集団との接触状況には違いが認められた。凹線文出現期までの状況把握を行い、主たる初期農耕集落の変遷像を掌握し、各々の性格付けが多様な遺物研究からもできるようになった。次段階に至れば、肥大環濠期とオーバーラップし、内陸部では新しい環濠集落が形成され始める（一例として、滋賀県守山市下之郷遺跡の環濠帯や居住域の成立）。他方、環濠の目立たないものでは、この時期に衰退の兆しをみせる兵庫県神戸市楠・荒田町遺跡、大阪府大阪市山之内遺跡、京都府向日市鶏冠井遺跡などがあり、近畿全体ではポジとネガの関係性を表出している点が重要な特徴と言える。この時期は、およそ紀元前２～３世紀で理解でき、最近調査された淡路島西海岸の松帆銅鐸（兵庫県南あわじ市）の最初期銅鐸埋納が行われた段階とも一致し、今後の自然科学的年代測定との関わりを有するため、その結果との照合も不可欠である。銅鐸の組成は、菱環鈕２式１口、外縁付鈕１式６口であり、これまでの銅鐸大量埋納と比較してもその属性のイレギュラー性は顕著である。近畿全体で農耕集落の再編が進行している階梯ではあるものの、これまでの俯瞰では看過されやすい時期と言える。銅鐸という近畿中心の分布をみせる大形青銅器は、初期農耕集落の離合集散や再編成の諸画期に見合うだけの多段階の埋納やその姿勢伝承を目的とした１口・２口埋納の連鎖など、多様な契機を考える時期がやって来ており、あえて紀元前の弥生社会における銅鐸埋納行為の始まりを仮説ながら提出した。銅鐸埋納と関わる植物質遺体の炭素年代は、この報告をまとめる段階に至って、較正年代値が紀元前 2～4 世紀の集中域を作ったと発表され、青銅器埋納の年代研究成果の一端が図らずも予察通りとなった。

（4）成果の一方では、課題となったことがらもいくつかみられる。土器学上の基準尺度は備わってきたものの、各地の在地的な突帯文土器の編年との整合関係や接触問題は、発掘資料の評価に時間的な共伴をどこまで認めるかなど、資料観察を推し進めた状況下でもなお言及できない部分、課題となった。突帯文から遠賀川への流れは近畿では未だ重複関係の時間的長さや両者の接点関係などに定見をみず、現象の評価を残したと言える。

しかし、遠賀川式土器自体の広域編年や暦年情報に関しては、手堅い基準づくりと観察視点を共有させつつ、併行関係把握のベースとなる広域編年表を作ることができた。すなわち、弥生時代前期の大別５期区分、細別９段階の詳細試案を提示することが可能となった。その年代の物差しは、初期農耕集落の刻々とした変化を読み解く上の土台ともなるものであり、無論「長期編年」化しつつある研究現状とも噛み合う点が強調できる点は重要な基盤成果である。

編年の具体相としては、遅れをとっている弥生時代前期の細分化と根拠づけ、旧国単位レベルでの広域編年の確立であり、北部九州（板付系）、響灘沿岸（綾羅木・高槻系）、瀬戸内・近畿・山陰・東海の 3 地域 3 系統の併行関係の立案となった。現行で最も進んでいたのが近畿編年であったが、細分の遅れている板付Ⅱ式～城ノ越式間の土器も一定のメルクマールを整備することによってたどれるようになった。現状では、1 期成立期を板付Ⅰa 式とし、2-1 期・2-2 期・3-1 期・3-2 期・4-1 期・4-2 期・5-1 期・5-2 期の前期細分案に、中期初頭の解体期である 6 期を加えての物差しが使えるものとなり、遠賀川式土器の東方波及段階が総覧できる。すなわち、中部瀬戸内・山陰因幡まで波及する 2 期、近畿まで波及する 3 期、東海まで波及する 4 期、各地で地域色がそれぞれ強まる 5 期という区分の提示でき、九州では時間の進行にしたがって無文化することが基因して、編年の細分に至らぬことも認識できた。大きなクッションは、瀬戸内-播磨間、播磨・摂津・河内-和泉・大和・紀伊・山城・近江間にあり、遅れる三河を除けば、近畿東部・南部と東海が著しい段差がない点が確認できた。

（5）言うまでもなく、弥生集落は当初から

完備された農耕集落ではない。さまざまなステップを踏みつつ農耕化を歩んでいる進行形の状態が大事であり、発掘された遺跡から窺える実態であろう。その踏み出し方に予想以上に強弱の格差がみられる集落であることが、このたびの広域調査でも確認できた。そして、列島に開花した弥生文化とは前述のごとくその階梯がモザイク的に一種のコンプレックスを織り成しているものを指し、「弥生」を冠することが農耕化、とりわけ灌漑水田稲作の達成度のバロメーターにはならない。この科研では、近畿地方における弥生集落の農耕化とは一体何かという基本的立ち位置に常々戻って問い直すことも大きなねらいとしたが、あらためて農耕活動諸要素の内実に迫れた点も収穫の一つに加えられよう。その具体的な示標として注目される環濠（環壕）のあり方については、前期段階には新来の墓葬と関連づけてみる必要があるが、環濠居住空間の分布圏（環瀬戸内海岸域東部～伊勢湾岸域）では集塊状墓群・配列墓群／帯状墓群であり、かつ集住域との分離を大きな特徴とし、また、区画墓（周溝墓）の創出と結びつくことが明らかとなった。初期農耕集落を分期する上での画期の一つであり、集団関係の進化とも整合する。遠賀川式土器の着床時期との懸隔は、北部九州を除いた地域では容認され、先の土器細分に照らせば、過半の地域でずれの生じていることも重要な所見となった。初期農耕集落の構造が遠賀川式土器の伝播と一律にならない具体的成果と言える。

（6）生得的な縄文から弥生へ、突帯文から遠賀川への移行問題は、これまでの研究に対してある種異なった結果も生んでいる。この問題は何度も波状的に議論されてきたことであるが、本科研グループ内においても時間的には接点的にみる向きと長短はあれ両者に併行関係を容認する立場が同居しており、弥生集落の農耕化という設問とも不可分な関係にあるだけに、なお議論を要しよう。従前の理解では、複数の集団関係をモデル化し、縄文集落側の農耕化現象を複雑にとらえ、実態把握に備えたが、土器の共伴・混在関係や棲み分けや共生・共棲といった集団接触の問題は、土器論・住居論・集落論の視角からの複眼的検討と土偶や石棒の扱い、銅鐸など青銅器生産など、時代や集団を表徴する祭器や多元的な分野からの発言と共同研究の蓄積から深まった部分がある。結果として、一線に並ぶようなものはなく、それぞれが相互にどう絡むのか、関係しないのか。諒解事項を一つでも前進させることができた。東日本からの影響論はこれまでにも多々みられたが、長原タイプの土偶と屈折土偶の系譜関係や石棒のありようなど、新しい視点に立っての議論が展開できるようになった。近畿は西日本と東日本の文化的要素が沈潜化する過程において、現象が錯綜することも確認できた。その点で列島の弥生文化の特質を世界発信させる下地が近畿地方の特性にあると見做しても過言ではない。

（7）本研究の発端とも言うべき京都府雲宮遺跡の構造研究については、環濠・竪穴住居・炉跡や土器埋設遺構・河川・杭列の実態を再検討しつつ、とくに焼土を伴う遺構の性格に関して考察した。環濠の変遷や集落の入口、橋の問題を深化させ、焼土に関しては廃棄要素の高いものと考えた。雲宮遺跡を包含する乙訓地域の弥生集落については、縄文時代後期～弥生時代後期の間の各時期変遷の詳細な分析を実施し、縄文晩期から弥生前期への移行に劇的変化がないこと、縄文時代以来のテリトリーが重視できることが明らかとなった。縄文要素の受容は集落間差が生じていることを突き止めた。地域比較研究を進めた比叡山西南麓の地形や遺跡立地の検討では、農耕化の過程で選地する微地形分析に成果があり、とくに生産領域と居住空間との関係性に関して、臨機応変な小空間可耕地が分散するありようの一端が解明でき、近畿内陸部扇状地地形でのモデルパターンが提示できた。そして、初期農耕集落が人口の増加を伴いながら複雑化を遂げる過程では、近畿大阪湾沿岸で基本となるモデルが描けること、具体的には、100 年は存続する零細経営期→突帯文土器を含む余地のない安定度の高い定着期→コア集団の顕在化を基盤とした地域社会の経営期といった図式化であり、最初期が無環濠期になることも追認できた。初期農耕社会が個別経営と協業的経営の狭間を包摂しつつ、より拡大した弥生中期社会に向かうことが考えられたが、同時に近畿と関係の深い他地域の様相は土器の階梯差とともに多様であることが認識できた。

ことに長岡京市雲宮遺跡の再検討が端緒となった基礎的研究も本科研では近畿、西日本、一部東海と見識、視野に入れる地域を広範な動きへと拡大させつつ、個別に全体に研究の歩を進めてきた。専ら出土資料の熟覧作業による地味な比較考証であったが、得られた個々の成果は大きいものであった。

既に発掘調査されてきた幾多の弥生遺跡を個々平板なものとせず、弥生集落の本格的農耕化の内実の一端が近畿地方を中心とする実践的研究からいくつかの見通しを提示、復元できた意義は大きいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 30 件）

①森岡秀人、近畿地方からみた縄文文化と弥生文化、季刊考古学、138 号、査読無、2017、55-58

①寺前直人、屈折土偶から長原タイプ土偶へ－西日本における農耕開始期土偶の起源、駒澤考古、40、査読無、2015、29-43

②森岡秀人、山陰弥生集落の独自性－近畿・山陽との比較から－、古代文化、600 号、査読有、2015、93-95

③田畑直彦、山口県佐波川両羽右記の弥生集

落、古文化談叢、75 集、査読無、2016、133-183
④村上由美子、弥生時代における木材利用の変化」、季刊考古学、127 号、査読無、2014、64-68
⑤森岡秀人、これからの弥生時代研究、季刊考古学、127 号、査証無、2014、14-18
〔学会発表〕（計 21 件）
①伊藤淳史、弥生時代水田研究の現状と課題－近畿地方を中心として－、第 195 回考古学研究会関西例会、2015、宇治公民館
②田畑直彦、山口県佐波川流域の弥生集落、第 173 回九州古文化研究会例会、2015、北九州市埋蔵文化財センター
③桑原久男、日本列島における稲作農耕儀礼－弥生時代の絵画土器と銅鐸絵画－、光州新昌洞遺蹟国際学術シンポジウム・稲作農耕社会の祭祀と儀礼－韓中・日比較－、2014、国立光州博物館
④村上由美子、縄文～弥生時代における林の管理と本製の道具、九州古代種子研究会、2014、久留米市市民会館
⑤森岡秀人、農耕社会の成立をいかに描くか、、第 41 回山陰考古学研究『農耕社会成立期の山陰地方』、2013、鳥取大学
〔図書〕（計 5 件）
①森岡秀人、櫻井拓馬、桑原久男、若林邦彦、山本亮、柴田将幹、川部浩司、長友朋子、大野薫他、魂の考古学、豆谷和之さん追悼事業会、2016、542

〔その他〕
以上の研究成果については、最終年度に当たる平成 28 年度にまとめの意味を兼ね、社会発信の一環として公開・普及シンポジウムを開催した（平成 28 年 12 月 23 日）。開催テーマは、市民にも理解しやすいものとし、「近畿で『弥生』はどうはじまったか⁉－初期農耕集落研究の最前線－」とした。当日は遠く関東や東海、中国・四国・九州からも参集し、大変盛況に終わった。各人の発表テーマは研究会の個別報告や議論を踏まえ、再度目的を吟味、確認して、総仕上げを意識しつつ設定した。本シンポジウムの構成は、趣旨説明（研究代表者：森岡秀人）、「第Ⅰ部　弥生農耕集落の形成過程と乙訓・山城・近畿―雲宮遺跡と地域論とモデル論―」（桐山秀穂・岩崎誠・伊藤淳史・若林邦彦・桑原久男が研究発表。地域に根差した初期農耕集落遺跡のミクロ・マクロな分析と弥生前期集落の動態モデル論や比較考証）、「第Ⅱ部　近畿地方における初期農耕社会形成過程の画期をめぐる諸研究」（田畑直彦・川部浩司・櫻井拓馬・國下多美樹・村上由美子・寺前直人が研究発表。農耕社会化の画期をめぐる年代論・画期論や石器・青銅器・鉄器・木器などの個別議論の研究到達点の成果報告）、「第Ⅲ部　農耕社会の誕生とその本格化を見直す」（シンポジウム　司会：森岡秀人・桑原久男）である。討議では、部門別の研究成果から見えてくる近畿の初期農耕社会の狭域的個別画期や広域的画期のありようが検討され、弥生時代の始まりでの地域差や弥生前期末での画期点の一致などが意味する社会変動などが議論された。金属器が卓越する段階に入ってのさまざまな動きを示す農耕社会の変動研究は、次のステップとして目指されるべき課題とした。

６．研究組織
(1)研究代表者
森岡　秀人（MORIOKA,Hideto）
（公財）古代学協会・客員研究員
研究者番号：20646400

(2)研究分担者
桑原　久男（KWABARA,Hisao）
天理大学・文学部・教授
研究者番号：00234633
田畑　直彦（TABATA,Naohiko）
山口大学学内共同利用施設等・助教
（平成 26 年度より研究分担者）
研究者番号：20284234
國下　多美樹（KUNISHITA,Tamiki）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：30644083
寺前　直人（TERAMAE,Naoto）
駒澤大学・文学部・准教授
研究者番号：50372602

(3)連携研究者
若林　邦彦（WAKABAYASI,Kinihiko）
同志社大学･歴史資料館･准教授
研究者番号:10411076
伊藤　淳史(ITO,Atsushi)
京都大学･文化財総合研究センター･助教
研究者番号：70252400
村上　由美子
京都大学・総合博物館・准教授
研究者番号：50572749

(4)研究協力者
岩﨑　誠（IWASAKI,Makoto）
桐山　秀穂（KIRIYAMA,Hideho）
上峯　篤史（UEMINE,Atsushi）
川部　浩司（KAWABE,Hiroshi）
櫻井　拓馬（SAKURAI,Takuma）
山本　亮（YAMAMOTO,Ryo）
柴田　将幹（SHIBATA,Masaki）
今井　真由美（IMAI,Mayumi）
上田　裕人（UEDA,Yuto）
朝井　琢也（Asai,Takuya）